

これは会議主催者による公式議事録ではありません。引用はお控えください。
This is not an official record by the meeting organizers. Do not quote.

タイトル	<p>CDM:持続可能な開発と CER</p> <p>CDM: Sustainable development and CERs</p>
主催	United Nations Framework Convention on Climate Change (UNFCCC)
日時	2005 年 12 月 6 日(火)13 時 ~ 15 時
主要討論者	<p>Introductory Remarks</p> <ul style="list-style-type: none"> • Sushma Gera (Chair, CDM EB) • Richard Kinley (UNFCCC Secretariat) <p>Sustainable Development in Ground</p> <ul style="list-style-type: none"> • Hirofumi Kazuno (Kansai Electric Power) & Karma Tshering (Bhutan) • Eduardo Reyes (Panama) • Iftexhar Enayatullah (Bangladesh) • Carlos Andres Vives (Chile) <p>Designated National Authorities for the Clean Development Mechanism</p> <ul style="list-style-type: none"> • Jose Miguez (Brazil) • Li Liyan (China) • Francisco Avendano (Peru) • Lwazikazi Tyani (South Africa) <p>Comments by CDM Capacity Development Partners</p> <ul style="list-style-type: none"> • Roger Peter (Pembia Institute for Appropriate Development) • Shinichi Iioka (Institute for Global Environmental Strategies) • John Christensen (UNEP Risoe Centre for Energy, Climate and Sustainable Development)
傍聴者	約 40 人 (民間事業者や NGO など)
目的	持続可能な開発と CER という観点から、国家指定機関 (DNA)、プロジェクト事業者、キャパビル支援者という活動を通じた経験をもとに CDM を議論する。
発表の概要	<p>CDM 理事会議長 Sushma Gera 氏は、まず始めに現在の CDM の進展状況を説明した。ACM 方法論が既に 8 件認められ、DOE も増加しており、プロジェクト推進のための環境整備が一層加速されていることを強調した。また、UNFCCC 内の体制も序所に改善され審査効率なども上がっていることを付け加えた。登録チームも 4 から 5 ヶ月以内に立ち上げる予定であることを報告した。過去の経験を活かすために、理事会機能を遅延させる原因となる未完全な新方法論の審査を避けるため、今後 Meth パネルもしくは DOE が初期審査を行えるような体制を整える必要があることを述べた。そして、DNA のためのフォーラムを開催するなど DNA の支援も検討する必要があることを述べた。</p> <p>UNFCCC 事務局の Richard Kinley 氏は、最近の CDM 登録状況や傾向を報告した後、今回の COP でマラケシュ合意が採択された重要性を改めて強調した。また、2005 年に入ってようやく CER が発行されたことを受けて、CDM が確実なものとなったと述べた。最後に事務局として、プロジェクトの立地が人目で分かるようなプロジ</p>

これは会議主催者による公式議事録ではありません。引用はお控えください。
This is not an official record by the meeting organizers. Do not quote.

エクト分布地図をウェブで公開することを現在検討中であると述べた。

持続可能な開発に資するプロジェクト例として、登録されたブータンのマイクロ水力発電プロジェクトについて、関西電力の数野裕史氏とブータンの Karma Tshering 氏が報告した。数野氏は、同プロジェクトはブータンの地方電化を支援するためブータンの隔離された村内の水力発電施設の建設であると説明した。2001 年から調査を開始し、2003 年に日本からの承認、2004 年にブータンからの承認を受けた。2005 年 5 月に理事会に登録され、8 月より発電を開始したと発表した。プロジェクトの持続可能開発への寄与は、約 50 件の家庭や学校への電気供与、薪燃料使用の減少、また地域のレストラン開業など地域の経済活動の活性化へ貢献したと述べた。数野氏と Tshering 氏は、プロジェクトの成功要因として、地域との密接な協力関係の構築、ホスト国のプロジェクト関与、コミュニティ所有権の確保などを挙げた。

Eduardo Reyes 氏は、パナマにおけるプロジェクト例（Los Algarrobos 水力発電）を紹介した。同氏は、プロジェクトから雇用の創出、インフラ整備、コミュニティの電化地域のナショナルグリッドとの連結などの好影響を与えると説明した。また、CER の数%が地域の植生への影響を緩和するために使用されると説明した。

Iftekhar Enayatullah 氏は、バングラデシュの登録案件であるランドフィルガスプロジェクトの事例を紹介した。同プロジェクトからは、周辺地域の環境改善に貢献していると説明した。

Carlos Andres Vives 氏は、家畜糞尿の発酵処理におけるメタン回収と燃焼プロジェクトの事例を紹介した。同プロジェクトは 2005 年 8 月に登録され、同氏はプロジェクト実施までに重要な事項はプロジェクトに関わる関係者間で友好的な関係を構築すること、市場自体が発展過程にある中で多少の変化を許容することが重要であると述べた。

中国の Li Liyan 氏は、DNA の観点から持続可能な開発に対する意見を述べた。同氏は、CDM は国家の持続可能な開発に関する国家戦略に順ずるべきであるとし、中国の CDM の特徴としてはプロジェクト所有者に中国事業者を含むことが義務付けられていることを説明した。また、中国は HFC または PFC プロジェクトの CER を 65%、N2O プロジェクトを 30%、その他 2%差し引かれることが決定していることを述べた。CDM に関する国内の問題としては、PDD の作成であり、プロジェクト所有者の関心が未だに低いこと、技術や方法論に関する専門家が少ないことが原因であると述べた。

ブラジルの Jose Miguez 氏は、DNA の観点から持続可能な開発に対する意見を述べた。また、CDM に関する国内状況として、合計 57 件が DNA に提出され、そのうち 21 件が承認されていることを述べた。

これは会議主催者による公式議事録ではありません。引用はお控えください。
This is not an official record by the meeting organizers. Do not quote.

	<p>ペルーの Francisco Avendano 氏は、DNA の観点から持続可能な開発に対する意見を述べた。同氏は、ペルーの持続可能開発に資する指標として、プロジェクトが国内法・規制に準じていること、既に確立された技術および導入方法を採用していること、プロジェクトサイト周辺や影響を与える地域の社会的な受け入れを示す必要があると述べた。</p> <p>南アフリカの Lwazikazi Tyani 氏は、同国内で既に 11 件の PIN と 4 件の PDD が提出されており、プロジェクトからもたらされる便益として、雇用の創出、クリーンエネルギーの提供、環境の改善、投資の増加などを期待していると述べた。</p> <p>次に Roger Peter 氏より、キャパシティビルディングの観点から意見が発表された。Pembia Institute for Appropriate Development は小規模プロジェクト支援を実施してきており、主な支援したプロジェクト例として、ジェトロファ種を用いたバイオディーゼルプロジェクト、学校や家庭を対象としたソーラー発電プロジェクトを挙げた。事業の実施から得られた経験から、地域の持続可能な発展に資するプロジェクトの多くは、トランザクションコストの問題を抱えており発生するクレジット量も少ないことから投資側やバイヤーに十分な魅力を有さない。しかし、プロジェクトの社会的な影響は大きく、ホスト国内の評価も高いという点を忘れてはならないことを強調した。</p> <p>IGES の飯岡眞一氏は、日本環境省の委託事業であるアジア諸国におけるキャパシティビルディングを紹介し、事業から得られた経験やプロジェクトやホスト国が抱える課題点などを述べた。</p> <p>UNEP RISO の John Christensen 氏は、同機関がこれまで実施してきた CD4CDM というキャパシティビルディングの活動を紹介するとともに、事業の成果や得られた経験について発表した。</p>
質疑応答	なし
資料	<p>UNFCCC ホームページより発表資料の入手可能。 http://regserver.unfccc.int/seors/reports/events_list.html</p>

文責：弥富 圭介（財団法人地球環境戦略研究機関）